

今朝の淡雪

土田龍太郎

紫式部に生れつきたる大和歌の才、おぼろけの歌詠みのをささ及ぶきはにあらぬは今さらに言はでもありなむ。五十四帖心をつけて讀みゆくにつれて、げに敷島の道ここにこそ究まりたれとおどろかれぬるほどにめでたき歌とところどころに見とむるをうべし。源氏物語に讀みならへるともがらの享くるさきはひげにさまざまなれども、わけてなほざりにすまじきは大和歌の方の徳用にほかなきなり。五十四帖のしげき言の葉に分け入りてさすらへありきぬるすゑに、つひには世にたふとき敷島の道のしるべを見出でむことたえて望むまじきにしもあらじかし。

手習の卷の中にて浮舟の詠める袖ふれし人こそ見えねの一首、幽玄のかたにとりていとも卓れたること、わがすでに説けりしがごとし。この一首にたぐへつべき秀歌ほかに少きにしもあらねども、ここにわけて採り上げまほしきは、若菜の卷上にて光源氏の朝けのあは雪によせてふと口ずさめる一首にてぞある。

光源氏の御兄朱雀院の姫宮四ところの内、父の院のことになしくしたまひしは三の宮なりしかど、この宮を、かたがたありし若くあてなる婿がねをおきて、すでに四十路に入りなむとせし源氏に嫁がせたまひしまでのこととなりゆき、若菜の卷上にいとつまびらかなれば、ここにまねばずともよろしからまし。

この内親王いともいはけなく齡いまだ十三四ばかりにてやうやく裳着のこと了へてほどなく六條院に渡りたまひしは、源氏の四十の賀ありし年更りて後、如月十日あまりのことにてぞありける。

葵の上まかりて後、源氏の嫡妻に異らざりしはかの藤壺の中宮の姪なる式部卿の宮の息女にほかならず。源氏この紫の上になさけをかくることたぐひなく、つねになにごともまめやかにむつび語らひてほかの妻どもよりわけていつくしくいとほしきものにして夜離るることもまれなりしかば、源氏の須磨明石を都に還りてよりこのかたおほかた後やすくこそ月日を送りたりしか。さるにゆくりなく女三宮の興入れありてよりは、紫の上と三の宮とあたかも二人の嫡妻おの母屋を間に寢殿の東と西にわけ住まへるがごとくになりもてゆきしかば、六條院のにはかにさまかはれることいともうちつけにて、紫の上の心惑ひなのめならざりけむこと思ひはかるにたへたり。

そも五十四帖の内にて光源氏と契れ女げにあまたあり、いづれとりどりにめでたきはさることなれども、生れつきたる人がらのあてにけだかきかたとは、紫の上に加え並ぶもの、かの薄雲の女院をおきてほかにさらに見出でかたかるべし。されば紫の上心ゆたけく

おほどかにて、三の宮とあひいどむあまりのうはなりねたみにたぐへつべきことさらにあるまじけれども、三の宮の側の女房どもよろづはなやぎて、紫の上のごたちややもせば消たるやにおぼえて、うはべはつれなくもてなせどもおのづからなほはしたなき心ちのきざせるをりさすがなきにしもあらざりけらし。

しかとは思ひ定むべき世にもあらざれば、行くすゑのことうしろめたく心亂るることのありしはげに避りがたきことわりとも云ふべからむ。かかる思ひにかられしけにやありけむ、あるとき紫の上、硯引き寄せて

目に近くうつればかはる世の中を

行くすゑとほくたのみけるかな

と書きすさびしことあり。源氏この歌をとりに見しときのこと、若葉の卷上にはつまびらかならねど、ただなほざりの言葉もて慰むるほかにせむすべとてなかりける源氏のなべてならぬ胸の苦しみいかにばかりなりけむただ思ひしのぶるほかなかるべし。

興入ありてより三日がほどは源氏もはら三の宮のかたにて夜を明したれども、風吹きて冷やかなる夜、紫の上たちまち夢に見えたればうちおどろかれて、心やましけれどもいまだ空明けやらぬさきに、雪消え残りたる白き庭を見やりつつ東の對に還りしことありけり。明くる日は、夜寒に心ちそこなはれて惱ましきをかごとにて、三の宮にはただ文のみやり、次の日もなほ紫の上のもとを離れざりしかども、さすが心やましきにたへざりけむ、白き紙の上に歌一首書きて梅につけてつかはしたり。

中道をへだつるほどはなけれども

心亂るるけさのあは雪

てふこの一首には女三の宮の返しありけり。

宮の筆のあとこそはをさなげなれ、詠める歌には巧みなる一ふしなきにしもあらぬは思ひのほかなれども、そはともかくもあれ、右の一首、二人の嫡妻むかひめのあはひにありて、こことかしこといづれにも片よりがたきままに立ちすくむほかなき中空なるやるかたなき心を一息にのべてあますところなし。夜の間に降れる雪、高く積りたらましかば行き來の妨げともなるべからましを、今わがかよひ路に残れるはやがて消ぬべきあは雪にすぎねば、なにはばかることなくただうちこえてやみぬべけれども、そのほの白きさまの目に入るからいかにぞやいとど胸さはがしくおぼえてはてしもなきはわが心の鬼にてもやあらむといへるが一首のおもむきなるべし。この日ごろ源氏の心にかかりてやまぬ云はむとしてえ云はれず、これなむそれとは捉へがたきはしたなくわりなき思ひを、させることなきあは雪

によせてたださりげなく三十一文字に収めたるこの歌たへなることよなし。これまた紫
式部の生得しやうとくの歌才をまぎれなく知らしむるにたれりと云ひつべし。

(令和五年四月二十五日受附)